
フォーゼマギカ

バース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フォーゼマギカ

【Nコード】

N9840X

【作者名】

バース

【あらすじ】

鹿目まどかが『ワルプルギスの夜』を倒し、全ての魔女を消し去ってから3年後：天の川学園高校二年生になった暁美ほむらのクラスに、あの男が転入してきた。

「俺は如月弦太朗！！この学校の連中全員と友達になる男だ！！」

彼の発足した『仮面ライダー部』と共に、ゾディアーツ、そして『魔獣』との戦いに身を置くほむら。

そして、彼女の出した結論は…？

これは、如月弦太郎と暁美ほむら、そして仮面ライダー部と魔法少女達が繰り広げるハイスクールストーリーである。

宇宙キターーーーー！！！！！！！！！！

第0話 私の最初で最後の友達（前書き）

第0話 私の最初で最後の友達

「はい、今日はみんなに転校生を紹介しまーす！」

それが、この日クラス担任の先生が朝一番で発した言葉だった。

転校生……それは一年に一回……いや、学校生活三年間の間に一回あるかないかのビッグイベント。

当然その言葉に誰しもが心躍らせ、いち早くグループに取り入れようとすることはず。

ゆっくりと扉が開かれ……そこから噂の転校生が姿を見せた。

「あ……あの……私……あの……あ、暁美……ほ、ほむらと言います……。よ、よろしく願いします！」

三つ編みの綺麗な長い髪に、大きなメガネをかけた気弱そうな少女。暁美ほむらと名乗るその少女は少し前まで心臓の病気ですっと入院をしていた。

つい先日その病気が治り、いつでも通っていた病院に行けるよう、そこから最も近いこの学校に転校してきたのだ。

内気そうな彼女は、休み時間になってもやはり、皆とは溶け込めず、質問攻めにあっても『その……』とか『えつと……』しか言わず。

これでは皆をがっかりさせてしまう……そう思い、シュンとした時だった。

「ごめんね皆、暁美さん…休み時間は保健室でお薬飲まなきゃいけないの。」

「ふえ…?」

突然、ほむらにそう言って笑いかけてきた少女が一人。

どうやらこのクラスの保健委員らしく、『保健室の場所わかる?』と聞いてきてくれると彼女の手を取り、教室の外へと連れ出してくれた。

保健室に行きながら、その子はアハハと笑いほむらに頭を下げる。

「ごめんね暁美さん、みんな転校生なんて珍しいからはしゃいじゃって。」

「うつん…ありがとうございます…。」

「アハハ、いいよ緊張しなくて!クラスメイトなんだから。あたし鹿目まどか!『まどか』って呼んで!あたしも暁美さんの事、『ほむらちゃん』って呼んでもいいかな?」

「えっ!?!」

驚いた。

今までこんな変な名前…呼んでくれる人なんて家族か病院の先生達ぐらいしかいなかった…。

いや、そもそも転校生という事を除いてもこんなに親しげに話しかけてくれる人なんていなかった。

「で、でも変な名前だし…あんまり、名前で呼ばれた事ないし…。」

「そんな事ないよ!あたしはかつこいい名前だなあって思うよ!」

「名前負けしてます…。」

「そうかな…?あ、だったらさ!」

「?」

「ほむらちゃんもかつこよくなっちゃえば良いんだよー!」

本当に嬉しかった。

この言葉に、一体どれほど元気づけられたかわからない。
自分はかつこよくなれない……最初はそう思った。
そう、あの時まででは……、

『魔女』に襲われるまでは…。

『魔女』……それは、絶望を振りまく災厄の種。

周囲に結界を張り巡らし、獲物を捕らえては殺す。

よく童話に出てくるような老婆の様な姿ではなく、人の形である事もあればモンスターの形をしている時もあるし、無機物の様な形をしている事もある。

狙われたら最後、死ぬしかない。

こんな形で死ぬなんて……絶望したほむらを救ったのは一筋の光。

「大丈夫ほむらちゃん!」

「……鹿目さん……?」

それは、ピンク色の衣装を身に纏い、弓矢を構えるクラスメイトの姿。

その隣には廊下ですれ違った事がある様な無い様な…とりあえず上級生っぽい少女が立っており、マスケット銃両手に黄色い衣装を纏っている。

何が起きたのか理解ができないほむらの隣に、白い猫の様な生き物が寄ってきて彼女に教える。

「彼女達は『魔法少女』！魔女を狩る者達さ！」

「あ、あなたは…？」

「僕はキュウベえ！よろしくね曉美ほむら！」

「いきなり正体がバレちゃったねほむらちゃん…クラスの皆には内緒だよ？」

それが、鹿目まどかとの『最初の出会』

以降、ほむらはまどかと、まどかの魔法少女の先輩である巴マミと共に魔女との戦いを手伝う事になる。

とはいっても彼女自身は魔法少女にはならず、戦いを傍で見ているだけ。

魔法少女とは少女達の祈りをキュウベえこと『インキュベーター』に叶えてもらい、その代償として魂を『ソウルジェム』と呼ばれる寶石に宿し、魔女を倒すために戦う戦士の総称。

魔法少女達はさらに力をつけていく事が出来るのと同時に、消費した魔力を取り除く事が出来るのだ。

この穢れを放っておいたらどうなるのか…それについてはキュウベえは何も言わない。

しかしそれでもまどかもマミも気にしなかった、勿論ほむらも。彼女達の目的はただ一つ…近いうちにやってくる最悪最強の魔女『

ワルプルギスの夜』を倒す事だけだった。
そして、とうとうその日がやってきた…。

「じゃあ、行ってくるね。」

弓を構え、まどかは背を向けほむらにそう言った。

彼女の足元には動かなくなってしまったマミの死体…『ワルプルギスの夜』やられ、ソウルジェムを砕かれたのだ。

ソウルジェムを失った魔法少女の末路は『死』のみ、しかしマミもそれは重々承知の上で、この戦いに身を投じていた。

「そんな…巴さん死んじゃったのに…！」

「だからだよ。」

壊滅する街、死した友…普通の人なら絶望するだけ絶望し、生きる気力すら無くす事態をいくつも目の当りにしながらも…まどかは笑っていた。

それはある意味諦めかもしれない、『ワルプルギスの夜』を倒せるのは自分だけだという覚悟かもしれない、ほむらだけでも守るという決意かもしれない。

まどかは笑いながら振り向くと、『ほむらちゃん』と呟いた。

「あたし、あなたと友達になれて嬉しかった。今でも自慢なの、あの時…貴方を救えた事。魔法少女になれて、本当に良かったって、そう思えるんだ…。」

「嫌……いけないで…！」

「さよなら、ほむらちゃん…。」

どうして…死んでしまつとわかつていたのに…。

この町が『ワルブルギスの夜』に壊されたとしても、誰もまどかを恨んだりしないのに…。

本当は自分の命なんてどうでも良かった、彼女が生きてくれるのならば。

どうせ消えるはずだった命、ならばせめて…まどかの力になれて死ぬ…そう出来たらどんなに良かっただろう…？

だから、やり直したいと思った。

「その祈りは本当かい？」

キュウベえが問いかけてくる。

勿論だ、迷いなんかない。

キュウベえと契約すれば魔法少女になれる、どんな祈りもソウルジェムとして輝かせる事が出来る。

ならばほむらの望む願いはただ一つ。

この願いの為になら命を…いや、過去未来全ての時間軸を掛けてもいい。

その願いとは……、

「私、鹿目さんとの出会いをやり直したい……。彼女に守られる私じゃなくて、彼女を守れる私になりたい！！」

こうして、曉美ほむらは魔法少女の力を手に入れた。

その力とは『時間干涉』

この力により、彼女は過去の自分に今の自分を上書きする『過去に遡ることに成功。』

今度は魔法少女として、まどかとマミに接触、協力した。

その強力な力ゆえに、彼女は前線では大活躍……と、言いたい但实际上にはやはり守られてばかり。

しかし今度は自分も戦える……一緒に『ワルプルギスの夜』を倒せる。そして……彼女の望み通り、彼女達はどうとう『ワルプルギスの夜』を倒す事に成功した。成功した……はずだった。

その瞬間、まどかのソウルジェムが突然グリーンフィードへと変わり果ててしまったのだ。

これが『穢れ』を取り除かなかった結末。

最悪の魔女を倒すには、最大の力を使わなければならない。

まどかは、その為に再び犠牲になったのだ。

『魔法少女が魔女を生む』

その答えを知ってしまったほむらは再び過去へと遡り、今度こそまどかを救おうと尽力。

しかし、その次もダメ。

次も、次も次も次も。

全部失敗、どれも最終的な結末は『まどかの魔女化』

まどかから生まれた魔女はキュウベえ曰く『ワルプルギスの夜』を遥かに凌駕する存在らしい。

その力は、歴戦の魔法少女達が何人も命を散らしようやく倒した『ワルプルギスの夜』を一撃で葬りさるほど。

悩んだ末、ほむらはいくつ目かの時間で出会ったまどかの言葉を思い出す。

『キュウベえに騙される前の…バカなあたしを助けて…。』

そうだ、簡単な事だった。

『まどかが魔法少女になる前に『ワルプルギスの夜』を倒せばいい』
そうしてほむらは今までの甘い自分を捨て、非常になりきり、まどかを罵倒してまで彼女を守り続けた。

マミが命を落とし、仲間の魔法少女である美樹さやかが魔女に堕ち、それを救う為に佐倉杏子が犠牲となり……それでもほむらは戦い続けた。

単独で『ワルプルギスの夜』に挑み、圧倒的実力の差を思い知らされ、彼女のソウルジェムがグリーンフィードに堕ちかけたその時……、

「もういいんだよ、ほむらちゃん。」

まどかだった。

この時間の彼女は魔法少女ではなく、普通の中学2年生の女の子。しかしそれでも魔法少女の戦いを近くで見続けていた彼女の眼には覚悟があった。

ほむらが何度も時間を逆行し、自分を救ってくれていると知ったまどか。

そのほむらの為に、彼女はキュウベえに願った。

『全ての宇宙、過去、未来全ての時間の全ての魔女を、生まれる前に消し去りたい』

「そんな祈りが叶うとしたら、それは奇跡なんてレベルじゃない！因果律そのものにたいする反逆だ！！まどか、君は本当に神様になろうとしてるのかい！？」

「神様でも何でもいい！！だから、これまで希望を信じてきたみんなを泣かせたくない、最後まで笑顔でいてほしい…。それを邪魔するルールなんて…壊してやる、変えてやる！それが私の願い！！さあ、叶えてよ…インキュベーター！！！！」

その願いは、宇宙そのものを救う願いだった。

勿論、まどか程強力な素質を持った者ならばそれは可能…しかし、これを行う事で彼女の人生には『始まり』も『終わり』も無くなってしまうた。

それはつまり、『この宇宙からの追放』

彼女の存在は『存在』よりも上の『概念』というものに成り果ててしまい、『鹿目まどか』という『概念』を認識できるものはただ一人としていなくなってしまう。

いや、1人だけいる。

暁美ほむらだ。

まどかは消える寸前に、ほむらに言い残した。

『あなたは私の最高の友達』

その言葉と共に自身のリボンをほむらに託すと、まどかの姿は徐々に消えてきた。

彼女曰く、『皆を迎えに行く』そうだ。

これから彼女は魔女に成り果てた全ての魔法少女達を救いにいくのだろう。

『じゃあねほむらちゃん、いつか…またもう一度会えるから…。』

「嫌……いけないで…まどか…！」

そうして消えていく鹿目まどか。

『概念』という名の『神』になった彼女は、この宇宙とはまた別の空間へと……その姿を消していった。

「まどか ああああああああああああああああああああああ
あああああああ！！！！！！！！！！」

それから三年後：天の川学園高校二年B組

ほむらはいつも通り、窓の外から景色を眺めていた。

窓の外では丁度三年生が体育の時間でマラソンをやっており、ほむらの仲間であるバマミも同学年である風城美羽と共に並んで走っている。

まどかが全ての魔女の存在を『無かった』事にした為、本来魔女に殺されたはずのマミもこうして生きている。

同じ様に魔女となった美樹さやかを助けようとした佐倉杏子も生きており、この学園に通っているがクラスは別。

しかし、そのさやかはどこにもない…。

たとえ魔女が出現しなくなったこの世界でも、人の世の恨みや闇が消えるはずはない。

それを付け狙い、今度は『魔獣』というものが出現しました。

さらにそれに合わせて、最近ではまた別の『闇』の存在が確認され

ている。

少し離れた席に座る歌星賢吾と城島ユウキがそれについて調べているそうだが、ほむらには関係ない。

彼女の標的は『魔獣』…これが今の魔法少女達の駆除対象。

魔女とは違い、魔法少女達が墮落してなる存在ではなく、あくまで別個の存在。

まどかのおかげなのか、ソウルジェムが黒く染まっても彼女達は魔女にはならず、そのまま消滅するのみ。

この当たり前の様な風景が、鹿目まどかによってもたらされたものだとは誰も知らない、いや……『知ることができない』

これを知っているのはほむらだけ、マミにも杏子にもわかるはずが無い、もちろんキュウベえにも。

「はい、今日はみんなに転校生を紹介しまーす！」

友達はいらない、いれば、その子は魔獣の標的にされる。

だから友達を作らない……ずっとそれでいいと思ってた、そうでなければならぬと思っていた。

あの男と出会ったまでは……、

「俺は如月弦太郎！！俺の夢はこの学園の連中全員と友達になる事だ！！よろしくな！！」

(……………暑苦しい男…バカみたい……)

如月弦太朗と曉美ほむら。

仮面ライダーフォーゼと魔法少女。

ソディアーツと魔獣。

そして、スイッチとソウルジェム。

これは、如月弦太朗と曉美ほむら、そして仮面ライダー部と魔法少女達が繰り広げるハイスクールストーリーである。

第0話 私の最初で最後の友達

第0話 私の最初で最後の友達（後書き）

ショートコント・弦太朗のフォーゼマガ力に対する感想

弦太朗「宇宙キターーーーー!!!!!!!!!!!!!!」

「!!!!!!」

ほむら「うるさい!!冒頭から騒がない!!」

賢吾「如月、ようやく本編に出してもらえて嬉しいのはわかるがもう少し落ち着け。」

弦太朗「つしゃあ!!この小説で友達100人作るぜ!!」

ほむら「それ以前にこの小説そんなにキャラでないわよ?」

弦太朗「(OAO)」

賢吾「…………。」

ほむら「さてと…さあ、行きましょう歌星君。」

賢吾「いやいや待て待て、如月どうする?」

ほむら「バカはほっとくに限るわ。」

賢吾（一話（厳密には0話）からこんな扱いでいいのか主人公!?!）

われていない倉庫のロッカーの中にアストロスイッチを使って生まれた空間を通り、月面に聳え立つこの場所にやってきている。

それとこの場所の所有者（？）であるはずの賢吾は『仮面ライダー部』を認めていない。

だがいくら否定しても弦太朗が引く訳が無いので、最近ではあまりそういう事を言わない。

彼らは今まさに、その仮面ライダー部の部室に行こうとしているところなのだ。

教室を出ようとする2人…すると弦太朗がある事に気付く。

「あれ？」

「どうした如月？」

「なあ、あいつって…？」

「あいつ？…ああ、曉美か。」

弦太朗が指差したのは同じクラスの少女、曉美ほむら。

彼女はいつも1人で本ばかり読んでおり、誰かと口を聞いているところなど見た事が無い。

放課後になっても教室で1人本を読んでいるほむら……『この学園の連中全員と友達になる事』を目指す弦太朗にとって、それはゆゆしき問題だった。

友達の友達は皆友達……それなのにクラスに孤立している存在がいる……と、なればするべき行動はただ一つ。

「賢吾！！！！先に行っててくれ！！！」

「は？いや…お前何するつもりだ？」

「決まってるだろ！！あの曉美って奴と友達になってくる！！」

「いやいやいやいや待て待て待て待て！？放課後は新しいスイッチの試験をすると言っただろう！そんなの明日の朝にやれ！！」

「いゝやダメだ！！俺はこの学園の連中全員と一刻も早く友達にならねえといけねえんだよ！！」

「何故だ！？」

「俺だからだ！！」

「いや意味わからない！！」

相変わらず弦太郎は時々わけのわからない事を言う…。

それに今まで付き合ってきたユウキの屈強さが痛いほどわかる、そんな歌星賢吾高校2年生の秋である。

ここで彼と揉めても全く得しないので、仕方なく賢吾は先にラビッツハッチへと向かって行つた。

賢吾が去っていくと、弦太郎は短すぎる学ランを羽織り直し、微妙なりーゼントを整えながらほむらの下へ。

ほむらが読んでいた本を覗き込みながら、彼は彼女に笑顔で話しかけた。

「何読んでんだ？」

「貴方には関係の無い物よ。」

「……………」

即答だった。

あまりにも即答すぎて何も言い返せない…弦太郎は実はかなりの口下手だったりする。

しかしそれでも彼は負けない……『友達マイスター（今命名）』の誇りに掛けて……！！

「それ面白いかな？」

「ええ、貴方と話しているよりずっと。」

「どういう本なんだ？」

「貴方とは一生無縁の本よ。」

「分厚いな？読むの辛くね？」

「私にとって貴方と話す方が辛いわ。」

「もしかして俺の事嫌い？」

「そうね、どちらかと言えば。」

今までに無い程の攻防戦……これはゾディアーツとの戦闘並みにスリルがある。

それでも弦太郎は負けない……否、負けたくない。

ここで負けては漢がすたる、以前に大文字や美羽に言われ通り、ただの『トラッシュ』だ。

だからこそ彼は立ち上がり、いつもの様に胸お何度か叩きほむらに手を向けた。

「俺は如月弦太郎！！この学園の連中全員と友達になる男だ！！暁美、お前ともぜってえ友達になってやるからな！！」

ガタっ！！

弦太郎がそう言った瞬間、急にほむらが立ち上がった。何事かと思ひ彼女の顔を見る弦太郎……その表情を見て、弦太郎はハッとしてしまった。

泣いている。

わんわん泣く…というか、涙だけを流しているという感じ。

彼女は弦太朗の胸蔵を掴むと、信じられないほど強い力で彼を教室の外へと放り投げた。

そして壁に叩きつけ、怒りの形相で彼に向かって呟く。

「二度と…、」

「え……え……？」

「二度と私に向かって……『友達』なんて言葉口にしないで……！！」

それだけ言うと、ほむらは荷物を纏めて逃げるように帰って行った。一体自分が何をしたのだろう……弦太朗はこの時、彼女の心の核心に触れてしまった事に全く気付かず、腑に落ちないまま彼も仮面ライダー部の部室へと向かって行った。

学園から500m程離れたマンションのとある一室

そこは天の川学園高校3年生である、巴マミの自宅だった。

彼女は4年ほど前に両親を事故で無くし、遠い親戚しかおらず身寄りもない。

だから中学生の時からここで1人暮らしを始め、アルバイトをしながら学校生活をそれなりに満喫している。

1年生の時から仲が良かった風城美羽は最近、チア部以外の謎の部活に入り鑢になっていく為放課後はほとんど会っていない。だから最近では自宅に直帰で、アルバイトがある日以外はここで勉強している。

主に3人で。

「お邪魔するわ。」

「あらほむらさん、いらつしゃい。」

「よう、ほむら！今日は早いな？」

一緒にいるのは同じ学年で別クラスの佐倉杏子。

一応マミから勉強を教えてもらうという口実で来ているのだが…来たらいきたい食うか寝るかしかしておらず、教科書なんか開いた試しが無い。

それでも学年末は基本的には10位以内に入るので、勉強は相当できる方だ。

「杏子、あなた勉強しないんなら帰ったらどうなの？」

「帰るつつつてもあたしん家、この部屋の隣だもん。」

「杏子さん、実はここ最近毎日夜遅くまでいるのよ……おかげで夕飯作るのが楽しくてしょうがないわ」

「マミさん、そいつに付き合つてるとそのうち『太り』ますよ？」

「杏子さん、今すぐ帰ってくれるかしら？」

「ほむらてめえ……！」

クスクスと笑いながら、自分も鞆を置いてマミと杏子の隣に座るほむら。

ここ3年間、毎日のように繰り返している日常だ。

はたから見れば彼女らはきつと『友達』に見えるのだろう。だが、実際には違う。

彼女達は『同志』なのだ。

同じ秘密を共有し、同じ悩みを持ち、同じ目的の為に生きる『同志』。
だからこそほむらも彼女達と一緒にいられる。
彼女の友達はいくまでも1人だけ……。

『鹿目まどか』

それは誰も知らない、曉美ほむらだけの最初で最後の友達。
彼女の事を想うと、今でも胸が痛くなる。

だからこそ、ほむらは友達なんか作らない。
友達なんか作っても……結局最後には悲しい別れが待っているのだから……。

仮面ライダー部

「それは君が悪い。」

「ええ〜？何でだよ隼〜？」

部室に着くなり先ほどのほむらとのやり取りの事を他の部員に相談してみた弦太郎。

それを聞くなり我らが大文字先輩が立ち上がり、弦太郎を叱り始めた。

何気に真面目に怒っている時の大文字は中々圧巻で、弦太朗も肩を小さくせざるを得ない。

「君はレディに対して無粋すぎるんだ。いいか？レディというのは…例えるならばそう！！まるでソフトクリームの様に柔らかく繊細で、それでいて儚い…。君の『友達になりたい』という気持ちもいが、ここはレディファースト、女性に対してはソフトで……そしてあま〜、」

「はいはいわかりましたわかりましたからそろそろアンタはすっこんでなさい隼。」

「なっ、み、美羽…まだ僕は言いたい事の5%も言い切っては…、」
「アンタ話すと長いんだからいいの。弦太朗にはスイッチの試験があるんだからそんなに長く話なんかしてられないでしょ？」
正論で何も言い返せないキング（笑）

しかしながら大文字の言葉で弦太朗も多少は反省したのか、かなり落ち込んでいる。

そんな彼を元気づけようと後輩のJKと友子がそれぞれエロ本となにやら意味不明な十字架（どこかのEXAのマークっぽい物）を差し出しているが、そこは美羽に止められた。

「でもさ弦ちゃん、あの暁美さんって……結構変な噂立ってるよ？」
「噂？」

そう言ってきたのは幼馴染であるユウキ。

彼女も友達から聞いた話だけど、と少し濁しながら、暁美ほむらという生徒について語り始めた。

「何でもあの子、夜な夜なこの辺を変なコスプレして出歩いているんだって！それで白い猫みたなの引き連れて…それでいきなり、『魔獣の気配がする……ッ！』…とか言い出しちゃうんだって！その直後に姿が消えたり、宙に浮かんたり……あーもう！言ってるこっちが怖くなってきたやつたよー！」

「ま……マママママジか……！？そそそりや、そりやりやや、ヤベエなあ……。」

「その話……もっと詳しく聞きたい……かも……。」

「え？うぎゃー……！！！！」

ビビっているユウキに追い打ちをかける（おもに上から）友子。

ただでさえオカルト＆ユウキ好きな彼女……おそらくユウキは当分開放してもらえないだろう。

情報通のJkも知らない情報なので、彼も是非とも話が聞きたいとユウキにすがった。

その様子を今まで見ていた賢吾……彼ははあ、とため息をつくと席を立ち、いまだにガタガタ震えている弦太郎の肩をポンツと叩いた。

「彼女が気になるのか如月？」

「あ？……ああ、まあ……。『友達』って言ってた時のあいつの顔……なんかすっげえ寂しそうだっ……。」

「………ってこい……。」

「え？」

「行つて来い、如月。」

「行つて来いって……え？賢吾？」

「君がそんな調子じゃ、スイッチの試験もうまくいくはずが無い。今回検証する予定だったこの『マグネットスイッチ』はまだ何もか

もが不明な謎のスイッチなんだ。そんな危険な物を、精神不安定なお前に渡してフォーゼドライバーを壊されちゃ堪らないからな。さつさと曉美に謝るか何かして、早く戻って来い。」

「賢吾……うおおおおお！！！！やっぱりお前俺の親友だあああああ！！！！」

「なっ！？だ、だから！！俺は君とは親友になった覚えは無いし、そもそもまだ友達になったとも言っていない！！」

「照れるな照れるな　っしやあ！！じゃあちよっくら行ってくるぜ！！！！」

早速荷物を纏め、部屋を出ていく弦太朗。

そう言えば、さっきほむらが教室に読んでいた本を忘れてたなと思いだし、弦太朗は一度教室へと向かっていた。

「！！……マミさん、杏子……！！」

「ああ、わかってる。」

「『魔獣』の気配ね。」

マミの部屋で勉強をするどころか何故かチーズケーキを食べていた3人は同時に同じ気配に気づくと、全員で部屋を出た。

『魔獣』……それは、彼女達が戦うべき敵。

古来より存在する厄災の種であり、同時に彼女達『魔法少女』が戦うべき敵。

奴らは人に隠れて生き、人々の魂を喰らい続ける。

そうなる前に倒す……それこそが魔法少女の目的だ。

『皆、用意はいいかい？』

「あら淫獣、いたの？」

『相変わらず君は口が悪いねほむら。』

巴家の玄関先でスタンバっていた白い猫の様な生物。

それこそが魔法少女の生みの親とも言える存在、『キュウベえ』

真の名を『インキュベーター』ともいい、簡単に言えば『宇宙人』だ。

魔法少女は全て彼と契約してから生まれる、彼曰く自分がいなければ人類はとくに滅亡しているか未だに洞穴暮らしで野生の動物を狩って生きていただろうとの事。

可愛い外見とは裏腹に信用できない胡散臭い奴だが、それでも彼女達とは3年間ずっと一緒に戦い続けてきた仲だ。

キュウベえと共に3人は『魔獣』の気配がする場所……『天の川学園高校2年B組の教室』へと向かった。

「何だ……こりゃ……？」

教室に入るや否や、弦太朗は信じられないものを目撃した。

何故か机や椅子が宙に浮いており、更に教室の中に階段があったり、今彼が入ってきたはずの入り口が無くなってたりしている……。しかも極めつけがコレ。

『オ……オオオオオ……ッ……！』

『ウオ……ウエエエエエ……ガラミゾ……！！』

『ウゴオ…ゴデ…グツデモイイガナ……？』

白いマントに身を包んだ身長5m近い男達。

常識で考えて普通の高校の教室の大きさに収まる様なサイズではなく…しかもところどころから一匹ずつ『生えてきてる』

気持ち悪いにも程がある……どうなってるんだろっこれは…？

「何だこいつら…？スイッチの化けもんでもねえ！？」

『ウゴオ……ザ、ザヨゴオオオオオオオ……！！！！』

「うわっ！？」

何と、一匹が舌を伸ばし、弦太朗を攻撃してきた。

彼はそれを何とかかわすが、次から次へと怪物たちは襲ってくる。

何がなんだかさっぱりわからない……彼が鞆の中に手を突っ込んだその時だった……、

「ティロ・フィナーレ！！」

ドカンッ！！！！

『ウオオオオオオオン……！！』

『オデノカダダダボドボダァー……！！』

何と、いきなり弦太朗の後ろから巨大な大砲が放たれ、怪物を数匹纏めて消し去った。

彼が思わず振り返ると、そこには3人の変な格好の少女が。

1人はイギリスとフランスの洋服を足して割ったような恰好にベレ帽を被ったマスケット銃の少女。

もう1人は赤い騎士の様な服に長いランスを持った少女。

そしてもう一人は……、

「あ、暁美……？」

「！？……き、如月君……？」

何と、暁美ほむら。

先ほどまでの制服とは違い、黒い服に小さい丸い盾を装備していた。赤い服の少女がほむらの肩を叩いて聞いてくる。

「何だお前？知り合いか？」

「え……ええ、一応、クラスメイト……。」

「あらそうなの？なら、しっかり守ってあげないといけないわね」
そう言くと2人の少女……マミと杏子は弦太朗の前に立った。

迫りくる怪物……『魔獣』を薙ぎ払っていく2人。

ほむらも弦太朗に早く逃げるように促しながら、彼女の武器である弓矢を構える。

だが……、

「……女にばっか……守られるわけにもいかなえよな……。」

「何を言ってるの！？早く逃げなさい！！……って、それは……！？」
魔獣からの攻撃を盾で防いでいたほむらが気付いたもの……それは弦太郎の腰のベルト。

大きいバックルに4つのスイッチが嵌め込まれており、彼はほむらの前に立ちながらベルトのスイッチを右から順に一つずつ入れていく。

「き、如月君……貴方なにを……！？」

「何だがよくわかんねえけど……こいつら片づければいいんだな！！」

『3……、』

スイッチを全部入れると、続いてベルトからカウントが始まった。
徐々に手を胸の辺りに近づきながら、弦太郎はベルトについているレバーを握る。

『2……、』

「おう曉美、危ないからちよつと下がつてろ！」

「何を言ってるの！？危なくて下がるのはあなたの……！？」

『1…、』

「変身ッッ！！！！！！」

その叫びと共に弦太郎は勢いよくレバーを入れ、腕を天に突き上げた。

すると彼の体を白い光が包み込み…どうじにロケットの発射の時の様な激しい噴射が辺りに巻き起こる。

それに耐えきれずに吹っ飛ばされるほむら…その次に彼女が見たものは…、

「あ……あれは……！？」

「宇宙…キター……………ッ！！！！！！！！」

ロケットの様な頭部に宇宙飛行士の様なボディ。

『仮面ライダーフォーゼ』が、魔法少女と魔獣に初めて邂逅した瞬間だった。

第1話 宇宙キター――！！！！！！

第1話 宇宙キターーーーー！！！！（後書き）

ショートコント：巴家の食糧事情

1日目

マミ「今日の夕飯、何にしようかしら…?」

杏子「あたし鍋食いたい!」

マミ「お鍋ねえ…いいかもしれないわね。そうだ、ほむらさんも呼びましよう!」

2日目

マミ「さてと、それじゃお夕飯の買い物して行くつかしら?」

杏子「今日はあっさりしたもの食いたいな…そうだ、パスタなんてどうだ?ボンゴレパスタ!」

マミ「あらいいわね!」

3日目

杏子「今日はおでんにしようぜ!」

マミ「いいわねえおでん!」

4日目

杏子「カレー食いたいな…。」

マミ「はいはいカレーね。」

5日目

マミ「今日は焼き魚にしようかしら？」

杏子「た・い！た・い！た・い！！」

マミ「鯛かあ…ならお刺身の方がいいかも？」

6日目

杏子「このトンカツうまーーーー！！！」

マミ「ふふふ、よかったわお口にあつて。」

7日目

ほむら「杏子、あなた勉強しないんなら帰ったらどうなの？」

杏子「帰るつつつてもあたしん家、この部屋の隣だもん。」

マミ「杏子さん、実はここ最近毎日夜遅くまでいるのよ……おかげで夕飯作るのが楽しくてしょうがないわ」

ほむら「マミさん、そいつに付き合っているとそのうち『太り』ますよ？」

マミ「杏子さん、今すぐ帰ってくれるかしら？」

杏子「ほむらてめえ！！！」

第2話 わけがわからないよ

「何……これ……？」

ほむらは一瞬、自分の目の前で起きた事が信じられなかった。

自分は確か、魔獣の気配を感じとり…魔法少女に変身して仲間と共に駆けつけた。

そこで魔獣に襲われていたのはクラスメイトの如月弦太郎で…彼女は彼を守らなくてはならなかった。

それがどうした事か？

何と弦太郎はほむら達が見た事も無い機械を腰に巻きつけ、なんと『変身』をしたのだ。

ロケットの様な頭部に、宇宙飛行士の様なボディを持った戦士に…、そう…、

「宇宙…キターーーーーーッ!!!!!!!!!!」

『仮面ライダーフォーゼ』に。

「き、如月…君…？」

「っしやあー!!下がってな暁美、ちょっと危ねえぞ!」

フォーゼはそう言うと、3人の魔法処女を押しつけ、5体の魔獣の前に立った。

敵目掛けて右手を突き出すと、彼は仮面の下でドヤ顔に成りながら叫ぶ。

「仮面ライダーフォーゼ！！タイマン張らしてもらっぜー！！」

「……はっ！？」「」

その言葉に同時に素っ頓狂な声を上げたほむら、マミ、杏子。

タイマン…それは簡単に言々と1対1。

だが敵は5体…どう見てもタイマンとは言えない。

もしかしてこの男…1人で戦うつもりなのだろうか？

『オ…オ…？ケンジャキ…！？』

『ゾノバズルノビーズハ…オデガノミゴンダアアアア…！！！！』

相変わらずわけのわからない言葉を叫びながら襲い掛かってくる魔獣。

長い腕を伸ばし、フォーゼを掴もうとする。

だがフォーゼはフンツと鼻で笑うと、ベルト『フォーゼドライバー』の一番右端のスイッチを押し、右腕を前へと突き出した。

『ロ・ケ・ツ・トノオン』

電子音声が鳴るとフォーゼの右腕にオレンジ色の武装が装着される。その名も『ロケットモジュール』…フォーゼ専用のブースターユニット。

ロケットモジュールの尾から白い煙がまき散らされ、フォーゼは前へ突進、魔獣の攻撃を避けた。

そのまま一旦停止し、魔獣の顎目掛けて再びアタック。

「おりゃあああああ！！！！」

『ボドボドッ！？』

ガコンツ！！と、良い音が鳴り倒れる魔獣。
空中に飛んでいくフォーゼはそこである事に気付いた。

「あれ？…ここ、天井無い？」

いつもならこのまま天井突き破っていくフォーゼだが、今回は何故かいつまでたつても天井にぶつからない。

この怪物達を作ったと思われる変な空間のせいだろうか？
しかしフォーゼは基本的に馬鹿なので細かい事など考えず、次のモジュールを発動。

『ラン・チ・ヤ・ー／オン レ・ー・ダ・ー／オン』

今度は右脚に『ランチャーモジュール』が、左腕に『リーダーモジュール』が出現。

ロケットモジュールをオフにして一旦着地すると、リーダーで魔獣をセツト。

右脚を前に突出し…フォーゼは魔獣目掛けて力一杯ランチャーを放った。

『ゴノツ！？』

『ギヨリダラ！！』

『バリアババレナイナツ！！？？』

「てめえら！！ちょっとはまともな言葉しゃべれ！！！」
「凄いだ…。」

フォーゼの戦いに圧巻されるほむら。

彼女だけではない、この場にいるベテラン魔法少女全員がフォーゼの戦いに見とれていた。

魔法を一切使わない多彩なモジュール攻撃…喧嘩腰な態度…そして

圧倒的なパワー。

これが仮面ライダーフォーゼ…。

魔獣一体倒すのに、魔法少女がどれほど苦勞しているか…フォーゼの戦いはそんな常識など覆すほど圧倒的だった。

最後にフォーゼは再びロケットモジュールを装備し、空中へ舞い上がる。

ベルトの右から3番目のスイッチをオンにし、彼は魔獣たちを見据える。

『ド・リ・ルノオン』

左脚に出現する黄色いモジュール…『ドリルモジュール』
それが現れると同時にフォーゼはフォーゼドライバーのレバーに手を掛け、それを思いっきり入れた。

『ロ・ケ・ツ・トノド・リ・ルノ』

『『『『『ザヨゴおおおおおおお！……！……！……！』』』』』

「『ザヨゴ』って誰だあああああああ！……！……！……！」

『リミットブレイク』

「ライダーロケットドリルキー……ック！……！……！」

フォーゼのツツコミと共に、ロケットモジュールとドリルモジュー

慌てて魔法処女3人は元の制服姿に変身を解き、フォーゼもドライバーのスイッチをオフにして変身解除。

弦太郎の姿に戻ると同時に教室のドアからひよこつと地学担当の生活指導…大杉が顔を見せ、彼は憎々しげに弦太郎を睨みながら言い放った。

「おい如月い…？お前こんな時間まで教室で何してんだ！」

「あ、いやあ…これはその…。」

「ん？おお！誰かと思えば3年生の『クイーン』候補、巴マミ君ではありませんかあゝ！私、実は君の事、いつかはクイーンを狙えると思ってるんですよえゝ、頑張つてね！」

「あ、はい…ありがとうございます…。」

何故か大杉は彼女が1学年下の教室にいる事は問わずに、彼女と握手してそのままどこかへ行ってしまった。

ここで話すと人目に付く…そう考えたほむらは…、

「仕方ないわね…マミさんの家に行きましょ、近いし、邪魔も入らないわ。」

それに同意し、3人は半ば弦太郎を連行する形で学園から姿を消していった…。

「それじゃ…説明してもらおうかしら？」

「その前にこの縄を解いてもらおうかしら？」

巴家へと連行された弦太郎は、逃げない様にと（ほむらの提案によ

り) マミの魔法でしつかりと椅子に固定されていた。

人間の力じゃまずちぎれないであろう魔法の網…何とかちぎろうと頑張るが無理っぽい。

何とかほむらに交渉してみるが、どうやら彼女は説明されるまで帰す気は全く無いらしい。

しかし縛っている本人のマミはさすがに可愛そうだと思ったのか…ほむらに少しゆるめるぐらいならいいわよね？と交渉。

3分の議論の末にはほむらが折れ、弦太郎は一応、手をともに動かせるぐらいには縄を緩めてもらえた。

「で、何かしらさっきの…えっと…」

「イカ！」

「そう、そのイカ…って、杏子、アナタちょっと黙ってなさい…。」

「何でだよ…イカっぽいじゃん！」

「おう！俺もイカ好きだぜ！！」

バンッ！！！！

「……………」

「「もうしわけありませんでした。」」

弦太郎と杏子に切れたほむらが学校指定のカバンに何故が入っていた拳銃をぶっ放した。

それにガチガチと震える2人…マミが『orz』とやっているのは気にしない方向でOK。

「で、なんだったかしら？」

「あれはフォーゼ！『仮面ライダーフォーゼ』だ！！」

「それそれで、何？あのフォーゼって？魔獣達に苦戦もせずに勝ってたけど…？」

ほむらがそう聞くと、弦太朗は『うーん』と唸りだし、ぼりぼりと頭を掻き始めた。

そうなるもの無理はない…何せ弦太朗、フォーゼの事を実は何も知らないのだ。

『スイッチ使って怪物と戦うヒーロー』

ぐらいにしか…。

「俺もあんま詳しくねえんだけど……コレ。」

ごそごそと鞆を漁り、ゴツイ機械を机の上に取り出す弦太朗。

これが先ほどの変身に使用したベルト『フォーゼドライバー』だ。

そこには4つの形の違うスイッチが嵌め込まれており、彼はそこから良く使うスイッチの一つ…『ロケットスイッチ』を引き抜くとそれを彼女らに見せた。

「何よコレ？」

「『スイッチ』だ！俺も良くしらねえけど、コイツがあると…何とというか…宇宙が来るんだぜ！！！」

「…はあ…？」「…」

さっぱり意味不明だった。

一応彼と同じクラスであるほむらに杏子とマミが『彼ってどういう人？』と聞くと、彼女は『多分…ただのバカ…』と答える。

間違っていない、全くもってその通りだ。

同じクラスであるほむらの言葉や、先ほどの言動とこのまっすぐな瞳…彼が隠し事をしそうな人間にはどうしても見えない。

多分、フォーゼも良く知らないで使ってるのだろう。

「この『フォーゼ』って何処で手に入れたんだ？」

「借りてるんだ！賢吾からな！」

「賢吾って…歌星君？確かにあなた達よくつるんでるけど…何？彼もそれに関係あるの？」

「おう！何せ俺達や『仮面ライダー部』だからな！！！」

「『『仮面ライダー部』?』」

聞いた事はある。

確か…都市伝説として語り継がれている『仮面ライダー』の名に肖った部活だ。

前は嫌味全開だったキングこと大文字隼や、プライドの塊の風城美羽、それに他人を平気で利用すると評判の悪かったJKも所属している部活で、何でも入部直後には以前とはまるで別人のように更生するとか何とか…。

マミも同じクラスで結構仲のいい美羽から話をちよろつとだけ聞いた事ある。

「この学校を怪物から守る部活だ!! 楽しいぜ!!」

「ああ…そう、良かったわね…」

もはや聞く気力すら失せる。

ほむらは久々に他人に対し、心の底からため息をついた。
まさか事情を聞き出すだけでここまで疲れるとは……。

「んじゃ、今度は俺が聞くけど…さっきの連中なんだ? 『ザヨリ』とか言ってた奴ら。」

「ああ…あれは…『魔獣』よ。」

「饅頭? 美味そうだな。」

「あなたの頭の中でなら美味しい温泉饅頭が作れそうね。」

「いやあ、それほども無いぜ」

「……………」

皮肉を言っているのがわからないのだろうか？

馬鹿なのか純粹なのか…多分前者だろう…。

「奴ら『魔獣』は人間の『憎しみ』という概念から生まれた怪物よ。誰が生んだ…とか明確な正体はわからない。突然異空間を作って現れて人を襲い、そして忽然と姿を消す…そういう連中よ。」

「アイツらが落としたコレ…なんだ？」

弦太朗がほむらに突き出したのは先ほどの魔獣が落とした黒いキューブの様な物。

大きさは消しゴム一個分ぐらいと小さく、パツと見黒糖に見えなくも無い。

ほむらは弦太朗が差し出したそれを受け取ると、自分のソウルジェムにかざし…黒いキューブはみるみる内に白く変色して行つた。

「これがこの『グリーンキューブ』の使い方よ。私達『魔法少女』の持つソウルジェムにかざす事で穢れを取り除き、魔力を回復する事が出来るの。」

「ま、魔法少女…？なんだそりや…？」

「それは僕から説明するよ！」

突然弦太朗の後ろから声が聞こえ、彼はとつさに振り返つた。

そこには白い猫の様な生き物が窓の上にぼつりと座っており、魔法少女3人がこの猫の事を『キュウベえ』と呼ぶと、キュウベえはテーブルの上に乗リパタパタと尻尾を振るう。

『魔法少女と言うのは、僕達『インキュベーター』と契約した少女達の事さ！僕が願いを叶える代わりに彼女達に『魔法少女』という戦士になつてもらい、魔獣達と戦った時に生じるエネルギーでエントロピーを増大させて宇宙崩壊を防ぐ為n、』

「猫が喋つたら頭良く見えると思つてんじゃねえぞ！！！！！！」

『…………ほむら、なんだい彼は？折角僕が僕の事見えるようにしてあげたのに…』

「大丈夫、彼はただの『馬鹿』よ。」

『わけがわからないよ。』

もはや人の話を一切聞かない弦太朗。

すると彼はいきなり立ち上がり『あつ！！賢吾達との約束忘れてた…！！』と頭を抱えて唸りだし、そのまま縄を引きちぎって鞆を手にとると玄関まで向かう。

「ちよつと如月君何処へ行くの！？」

「わりの曉美…賢吾達との約束すっかり忘れてたんだ……………そんな！」

「あ、ま、待ちなさい!!」

手を振ると、弦太郎は走って部屋を飛び出し、再び学校へと向かって行った。

その途中で彼はある事を思い出し、エレベーターに乗る前に急いで再びマミの部屋に向かうと、ほむらを呼びつけた。

「曉美!!」

「な……何よ……?」

「お前にも、こんな良い友達がいたんだな!!なんかちょっと安心したぜ!また明日な!!」

「あ、待ちなさい如月君!!きさ…もう…」

それだけ言う為になんか引き返してきたのだろうか?

『友達』…その言葉に、ほむらは一瞬心が揺らいた。

振り返ったそこには、3年前からの『同志』である杏子とマミ…それとキュウベえ。

もしかしたら彼女達は世間一般的にみると…友達、なのでは無いだろうか…?

そんな事を考えた、ほむらはハッとするとフルフルと頭を振り、そ

んな考えを振り切った。

（そうよ…私の友達はまどかだけ……友達は……。）

第2話 わけがわからないよ

第2話 わけがわからないよ（後書き）

ショートコント：キュウベえの日常

キュウベえ『やあ！僕はキュウベえ！どこにでもいる普通のインキ
ユバーダーさ！僕は普段、散歩がてらいい魔法少女候補がいなか
どうか調査をしているんだ！今日はそんな僕の日常を紹介するよ！』

タマ「にやー！」

キュウベえ『おや？君は3丁目の梅村さんとこの末っ子タマちゃん
じゃないか？どうしたんだい？』

タマ「にやー！」 口にくわえた魚キュウベえに差し出しながら

キュウベえ『これは？』

タマ「にやー！」

キュウベえ『くれるのかい？…ごめんね、僕は味覚を感じないから
食べても意味が無いんだ。これは君の獲物だから君が食べなよ。』

タマ「にやー！」

キュウベえ『いつも遊んでくれてるお礼だつて？まるで僕が猫みた
いじゃないか……仕方ない、そこまで言うならもらっよ。』

タマ「にやー！ー！」

キュウベえ『どういたしまして。』

大杉「あー…園田先生は俺の事『好き』……『嫌い』…『好き』…
『嫌い』…。」

キュウベえ『あの人はあんなところで花を筆って何をしてるんだろ

う？わけがわからないよ。

大杉「きら……！？うがああああああ！！！！！！これも全部如月のせいだあああああ！！！！！！」

「キュウベえ、本当にわけわかんねー…。」

キュウべえ
「ただいま。」

ほむら「あらおかえり。今日は何してたの？」

キユウベえ「君の学校でわけのわからないものを見たよ。それと梅村さん家のタマから魚をもらった。」

ほむら「何それ？」

第3話 友達を作らない（前書き）

今回は短めでクオリティも低めです。

第3話 友達を作らない

仮面ライダーフォーゼとの出会いから半日が過ぎ…朝の7時。

ほむらはいつもの様に目覚ましの音で目をさまし、まだまだ眠たい目を擦りながらベットから起き上がった。

頭をポリポリと掻きながら、自分のベットの隣に置いてあるバスケット籠の中を覗く。

そこには白くてモフモフした物体が体を丸めて眠っており、彼女は籠を掴むとそれを盛大にひっくり返した。

どさりという音が鳴り、籠の中から落ちる猫っぽい変な物体。

それはモゾモゾと動くと、ふぁ〜という小さな欠伸をしてほむらに言った。

「おはよう、ほむら！」

「起きるの遅いわよキュウベえ……さつさと支度するわよ。」

「了解だよ。」

もう一度2人して欠伸をすると、まずほむらは洗面所で歯磨き。

それから簡単に朝食を済ませると、天ノ川学園高校の制服に着替え、机の上に置いてある自分のソウルジェムを手にとった。

それを首からぶら下げて、彼女は宝箱の中にしまっている一本のリボンを取り出す。

「おはよう……まどか……。」

それは彼女の最初で最後の友達だった鹿目まどかの物だったリボン。彼女が『円環の理』として消える直前、ほむらに託した…『まどかが存在したという唯一の証』

このリボンはほむらにとって自分の命よりも大切な物であり、何が

あろうとも絶対に守らなければならない宝物。

しかしこれを隠しておくような事はせず、黒い髪には目立ちすぎる色合いのそのリボンを巻くと、ほむらはキユウベえを肩に寄せ、学校へと向かった。

「よう賢吾！おはようさん！」

「如月……お前、結局あの後帰ってこなかったな……？」

「あ……あー……わりい……ちょーつと変な連中に絡まれてさ、そいつら倒してから来たら……もう皆帰っちゃまって……。」

「もう！だったら連絡ぐらくれればいいのに！」

「わりいユウキ！賢吾！今日帰りにラーメン奢るから！なっ！？」
いつもの様に登校してきた弦太朗は、昨日の事などまるで忘れたかのように普段通りの振る舞いを見せ、さも当然の様に賢吾達と話し始めた。

別のクラスである佐倉杏子は弦太朗が昨日の事を他の連中に喋らないかどうか、窓から観察中。

特にまだ言いふらすような感じはしない……。
アンパンをかじりながらジーツと弦太朗を睨みつけていると……、

「おはよ。」

「どひゃあああああああ！……？……？」

突然後ろから肩を掴まれ、杏子はこの世のものとは思えない程の絶叫を上げた。

それにはさすがにクラス全員が気付き、一斉に杏子へと振り返る。
その杏子自身も振り返ってみると、そこにはクラス全員と同じようにビックリ仰天という顔をしたほむらとキュウベエの姿が。

「なんだよお前かよ！？脅かすなよ！！」

「脅かすなつて……私は普通に挨拶ただけでしょ？それよりそこ、立ってられると邪魔で教室入れないんだけど？」

『何を見ていたんだい杏子？』

「あ？いや……あの如月つて奴が周りの連中にあたしらの事喋らねえか……」

どうやら杏子は弦太朗が魔法少女の事を周りに言いふらして、自分達を笑いものにするんじゃないかと疑っていたようだ。

確かにそんな事されたら困るが、特別ほむらは心配していない様子。弦太朗を信頼している……とかじゃ無く、彼が仮にも魔法少女の事を周りに言いふらしても、『仮面ライダー部』に所属して友達友達言いまくっている一直線馬鹿の厨二的発言など、誰も相手にするはずが無い。

そのライダー部の奴らならわからないが……とにかく、彼のせいで自分達の事がばれる事は無いだろうというのがほむらの考え。

そう言つて杏子を追い払うと、ほむらは自分の席へ。

それに気づいた弦太朗はにやりと笑い、彼女の席まで行くとほむらの席をダンっ！と叩いた。

「よう！おはよう晝美！！」

「……ええ、おはよう。」

「何だよ元気ねえな？友達……佐倉と巴先輩だったか？一緒に来てないのか？佐倉つてもしかして別のクラス？」

「あなたには関係無いでしょう……さつさと城島さん達のところへ戻りなさい。」

「おう！じゃあな！」

それだけの挨拶をかわして再びユウキ達のところへ行く弦太朗。
彼の姿を見ながら、彼女は昨夜の事を思い出した。

別れ際の彼が言った一言……、

『お前にも、こんな良い友達がいたんだな！！なんかちょっと安心したぜ！』

あの言葉が妙に頭に張り付いて離れない……。

忘れようと何度も頑張ったが、やはり忘れられない……。

『友達』……違う、杏子やマミやキュウベえはそんなのじゃない。

彼女達はただ……目的を同じとするだけの『同志』に過ぎない……。そんな中、彼女の携帯がブルブルと鳴った。

開いてみると、マミからメールが届いており、内容は『今日の夕飯と一緒にしない？』だった。

たかが同志でこんな言葉を贈るだろうか……？
これは……、

（ねえほむらちゃん！今日のお昼一緒に食べない？）

「違う……。」

まどかのそんな言葉を思い出した。

いつでも自分に優しく接してくれ、勇気づけてくれた大事な大事な最愛で最初で最後の友達。

彼女の言葉には本当にいつも助けられた……だったら、マミ達はど
うだろう？

（昨日からなんか調子狂うわ……これも全部アイツのせいよ……………。）

（そうかな？僕には君が嬉しそうに見えるけど？）

（なっ！？きゅ、キュウベえアンタ勝手に人の頭の中覗くのやめなさいっていつも言ってるでしょ！！だいたいインキュベーターのアンタが人の感情なんかわかるわけないでしょ！？）

（確かにそうだけどさ…………でも君の頭の中、いつもその『まどか』って子の事考えてる時とおんなじくらいのエントロピー出てるからま、僕に得のある話じゃ無いから興味は無いけど。）

頭の中でそう言うと、キュウベえはほむらの肩から降りて教室を出て行った。

普通の人の目には見えないからいいものの（動物には見えるらしい）

…………あんな宇宙外生命体が校内をうろつき回っていると考えると少し気分が悪い。

キュウベえの姿が見えなくなるとほむらは拳を握り…………唇を噛みしめた。

（友達なんて…………作らない…………！）

昼休み、賢吾やユウキ達は仮面ライダー部の部室…ラビットハッチで昼食を摂る事になり、当然弦太朗もそれには参加する予定。しかし、彼には肝心の弁当が無い。その為に購買へ向かう彼は…………、

「昼メシキター——！！！！！！！！」

まさにロケットの如く……校内を走っていた。

一日5食限定の『天高特製エビフライ弁当』…これにありつく為に、日夜生徒間での争いが絶えない。

ロケットモジュール着けてんじゃないかってぐらいのスピードで急いで購買がある学食へ行き…財布から小銭を取り出して握りしめると、それを購買のおばちゃんの前に叩きつけた。

しかし結果は…、

「ごめんねえ……ついさっき売切れちゃったんだよ。」

[illegible]

慘敗。

仕様が無く、パンを適当に3つほど買い、弦太朗はトボトボと仮面ライダー部へ向かう。

その途中だつた。

「あれ？ 暁美？」

「何か最近よく会うよな、お前もメシか？」

「……見ればわかるでしょ？」

丁度図書室の廊下で、弁当の袋をぶら下げているほむらと出くわした。

どうやら昼休みにここでマミや杏子（ついでにキュウベえ）と食べるらしい。

中を覗くとすでにマミは来ているようで、キュウべえにプチトマトを食べさせている。

「あなたこそここで何してるの…図書室なんて、アナタのイメージ」

から180 かけ離れているんだけど？」

「お、俺も本ぐらい読むぜ！！『北の拳』とか『ドラもん』とか！！」

「漫画ばかりじゃない……ところでお昼、それだけなの？」

「ん？あ……ああ……」

ほむらに言われて、弦太朗はハハハと苦笑して袋を見せた。

中にはアンパンと焼きそばパンとソーセイジパンが各一個ずつ……どう考えても、成長期真っ只中の男子高校生である弦太朗には少なすぎる。

先ほどまで元気だった弦太朗の表情がだんだんと沈んでいき……最後にはうなだれてしまった。

「こんなのでよければあげるわ。」

「へ……？」

そう言っただけで、ほむらが差し出してきたのは、なんと特製エビフライ弁当。

何でも杏子が一回食べてみたいとか言うので、代わりに買って来たんだそう。

幸い彼女が行った時はまだ誰もおらず、難なくGET。

「い、いいのか……？これ佐倉のなんだろう？」

「あの子はどうせ私やマミさんのまで食べるからいいのよ。それだけじゃ足りないでしょ？」

「あ………暁美………！！お前良い奴だな……！！」

「いるの？いないの？」

「いますいます……！！下さい……！！」

JKも美味いと絶賛したエビフライ弁当、GET。

少し冷めてしまっているが、問題無く美味しく食べれるだろう。

ほむらの手を取り、弦太朗は彼女に大感謝。

「ありがとよーありがとよー!!」

「や、やめなさい！友達でも無いんだから…」

「だったら今から俺とお前は友達だ!!」

「……………」

弦太朗がそう言い放つと、ほむらは冷たく彼の手を振りほどき、図書室の扉に手を掛けた。

そして背中越しに、彼に言う。

「友達は……作らない……!」

それだけ言い残し、ほむらは図書室の中へ。

『あつ』という声を上げて弦太朗が彼女を追いかけてようとしますが、彼女の言った言葉に少し違和感を感じ……追いかけるのをやめて部屋へと向かった。

ラビットハッチ

「うーす。」

「あ、遅いよ弦ちゃん！」

「皆お前を待つて食事に手を付けてないんだ、全く……昼食なんて学校来る前から用意しとけ。」

「わりいわりい。んじゃ、早速食おうぜ！」

仮面ライダー部で彼を出迎えてくれたのは、クラスメイトの賢吾とユウキ……それと先輩である美羽と大文字、後輩のJKと友子だ。

全員で弁当を広げては、朝の授業について話したり、普通に高校生らしい話をしたり……。

最近では賢吾も仮面ライダー部の皆とかなり打ち解け、彼は隣に座っているJKと一緒に楽しそうにしゃべっている。

そんな中で……これだけのメンバーを変えるきっかけとなった男、弦太郎だけは弁当を食べる箸が進まずに会話に参加していなかった。それに気づいた友子と大文字が弦太郎を心配し、彼に呼びかける。

「どうしたの弦太郎さん……？」

「どこか具合でも悪いのか？ここ数日ゾディアーツが出現していないから……今までの疲れが出たんじゃないのか？」

「あ、いや……別にどこもわるかねえんだけど……ちょっと考え事が……。」

「ええ！？弦ちゃん考え事とするの！？」

「賢吾君、保健室の医療体制はどんな感じなの？」

「弦太郎さん体大丈夫ですか！？どっかの大きい病院で診てもらった方がいんじゃないっすか！？」

「おい……さすがに皆、如月に失礼だろ……。」

全員が本気で心配してくれている……喜んでいいか正直微妙なところだが……。

とりあえず賢吾により全員が反省し、代表して賢吾が弦太郎に聞く事に。

すると弦太郎は『暁美の事なんだけど……』と切りだし、この間の事を話し始めた。

勿論『魔法少女』や『魔獣』の事は話さず、あくまでさわりだけ。

「それでアイツ……さっき俺に言ったんだ。『友達なんか作らない』って……」

「それは暁美が友達が欲しくない……という事じゃ無いのか？お前のその性格は、場合によっては人を大きく癪癪させるからな。……まあ、かくいう俺も最初はその1人だったが……」

「いやなんかな……どっか引つかかるんだよなこの言葉……何だ……？」

ほむらの言葉のどこかにバリを感じる弦太郎。

同じ様に、賢吾も彼から聞いたほむらのセリフに違和感を感じていた。

どういう事なのか……それを確かめるのはもう一度彼女に会って話す必要がある。

彼女が友達を作らない理由………それを知りたい。

「なあ賢吾……俺放課後………」

「暁美のところだろ？言われなくてもだいたいわかって来たよ……君のその単純な頭はな。」

「言ってくれるぜ！」

2人はお互いにフツと笑うと、昼食を食べ終え、全員でそれぞれの教室へと帰って行った。

第3話 友達は作らない

第3話 友達を作らない（後書き）

弦太朗去った後の魔法少女達

ほむら「お待たせ。」

マミ「ほむらさん、お疲れ様。ごめんなさい、もう先に食べ始めちゃったわ。」

キュウベえ『このプチトマト、中々甘くて僕の中のエントロピーがリミットブレイクしそうだよ。』

ほむら「そりゃ良かったわね。」

杏子「おーい！悪い遅れたー！」

マミ「杏子さんお疲れ様。」

杏子「おっすマミ！お、ほむらほむら、弁当は？」

ほむら「買えなかったわ。」

杏子「ええー！？マジかよあたし今日の昼メシどうすんだー！？」

マミ「私のお弁当半分食べる？」

ほむら「まあ……買えなかった私にも非はあるし、私のも少しならあげるわ。」

杏子「お……お前ら……（涙）」

ちなみにほむらは弁当代を杏子に返しませんでした、理由？エゴだよエゴ。

第4話 友達を作らないわけ

放課後になり、賢吾達にラーメンを奢るという約束を先延ばしにしてもらった弦太朗は今日は部活に行かず、クラスメイト達がほとんどいなくなるのを見計らい…ほむらの下へと行った。

しかも…堂々とはなく割とこっそりと。

コソコソする理由は、『男らしく堂々として行ってダメだったんだ!! だったら今度は男らしく無く、コソコソと行くぜ!!』だそうだ。黒板を消し終わると彼女は鞆を片づけ、誰もいなくなった事を確認すると『おいで』と呟き…すると何処からか白い猫の様な生き物 キュウベえが姿を見せ、ほむらの肩に乗った。

彼女が席を立ち教室を出てから弦太朗も寝たふりを解除してほむらを追いかけて学校を出る。

今頃仮面ライダー部の皆は何してるんだろうな〜と考えながらも彼女の後をこっそりとつけ続け…とりあえず傍から見たら完全に不審者。

途中ほむらは夕飯を買う為にスーパーに立ち寄り、弦太朗は店の外で待機。

そのまま待つ事30分……ようやくの事ではむらが出てきた。

すでに弦太朗は体の芯までガチガチに冷え切っており(冬だもんね)、震えながらも追跡再開。

彼女の住んでいるアパートまでようやく辿り着くと……弦太朗はほむらが自分の部屋に入っていくのを…そっと見送った…………。

「って、しまったあああああああああああ……!!!」

そこで彼は自分が何のために彼女を追跡しているのか思い出した。

『友達を否定している曉美ほむらと友達になる為』

その目的を完全に忘れてただ彼女が帰宅するのをコソコソと見ているだけなど…もはや完全にストーリーカーでは無いか。

このまま部屋に飛び込んでいくのもアリだが…その場合間違いなく銃殺されるだろう。

しかし、何もせずに帰るのも…学校に残っている仮面ライダー部メンバーに申し訳がない。

どうしよう……そう悩んでいると、弦太郎の肩がいきなりズシツと重くなり、振り返ってみると彼の肩の上に何故か白い猫が。

キュウベえだった。

『君はこんなところで何をしているんだい？』

『お、お前は昨日の喋る頭の良い猫！！！！』

『キュウベえだよ。』

『私に何か用？』

『あ。』

『学校からずっと気づいていたよ。ほむらはベテランの魔法少女だからね！』

上を見上げると、アパートの『202号室』の窓からほむらが顔を出しており、弦太郎はキュウベえに言われるがままに彼女の部屋へ。

とりあえず居間らしき卓袱台のあるところまで案内されると、彼の目の前にそつとお茶が差し出された。

「なんつつーか……意外……だな？」

「マミさんみたいに高級マンションじゃ無くてガツカリした？それとも魔法少女らしくもつとオカルトチックな部屋かと思った？」

「いやぁ……もつとこう……宇宙が来る様な部屋かと思ったぜ。」

そんな部屋にしているのは、恐らく日本全国どこを探しても城島ユウキだけだろう。

弦太郎は女の子の部屋など、ユウキ以外では昨日のマミの部屋が初めてだったので……。

それで？とほむらから切り出し、彼女は目を細めて彼に聞いた。

「私の跡をつけていた理由を聞きましょうか？」

「あ、ああ……いや……お前と友達になりたくてよ。」

「呆れた……如月君、それストーリーカー。立派な犯罪。訴えたら勝つ自信あるわよ？」

「わ、わりい……。」

さすがに言い返せなくなり、黙り込む弦太郎。

だが、ほむらのセリフが前ほど噛みつく様なセリフでは無いので……これは一応進展ありという事でいいのだろうか？

別に彼女は怒っていない……聞くんなら今しかない。

彼女が言った『友達とは作らない』というあの言葉の意味……それを確かめなければ。

「……なあ暁美……？」

「何？用が無いんなら早くかえら、」

「お前……本当に友達、作らねえのか……？」

「……またその話？何度も言うようだけど、私は友達なんか作る気は無いの。」

「そこなんだよな……引つかかるの。友達が『いらない』んじゃないくて……友達を『作らない』って言うのが……。」

「ッ……!!」

弦太郎に言われて立ち上がるほむら。

彼女は弦太郎の腕を掴むと、彼を無理やり引きずり、部屋の外へと追い出した。

おつとつと、と弦太郎がちよつとこけそうになると同時にほむらは部屋のドアを勢いよく閉めた。

「お、おい曉美……!!」

「帰って……!!もう私にかかわらないで……!!」

「どういう事だよ……!!おい……!!」

「いいから……!!」

何とかドアを開けようとするが、魔法少女の力を持つほむらの腕力は弦太郎よりも強く、中々ドアを開けられない。

しばらく頑張ってみるが……中から『グスッ……』という声が聞こえ、そこで弦太郎は手を止めた。

今日は失敗しても、ほむらとは同じ学校で同じクラス。

「……………仕方ねえ……………また明日か……………」

諦めたわけではない。

しかし、今日のところはソツとしておいた方が良さそうだ。そう思い、弦太郎は仮面ライダー部の部室に戻る為に学校への道へと戻った。

『…………泣いているのかい?』

「そんなわけないでしょう…………。」

『嘘だね。知ってるかい? 君、嘘つくと耳がぴくぴく動くんだよ。』

「え、嘘っ!？」

『嘘だよ。』

キュウベえの頭を掴み、壁に叩きつけるほむら。

ベチヨツという嫌な音が鳴り、キュウベえの頭が粉々に砕けた。

それを地面に落とすと…………なんといつの間にか新しいキュウベえがすでにほむらの肩に乗っかっており、彼(?)はフウとため息をついた。

『全く、君も素直じゃ無いね…………。』

「何がよ…?」

『マミや杏子たちと話してる時や、あのフォーゼっていう奴と話してる時の君、『まどか』って子の事話てる時みたいな感じになるんだよ。『まどか』って子の事話てる時、君…いつも楽しそうだよね?』
「インキュベーターごときが、人の感情なんかわかるわけないですよ?」

『残念だけど君は人間じゃ無いし、そんなに浅い付き合いでもないだろう? まあ…どうでもいいけどね。それより魔獣の気配だ、行くだろう?』

「当然。マミさんや杏子たちが来てるかわからないけど…………早く行くに越したことは無いわ。」

「またこいつらかよ…………!？」

その頃、仮面ライダー部へと向かっていた弦太朗は……また例のあの境界に閉じ込められ、身動きが取れなくなっていた。

魔獣の境界……これは本当に突如として出現する為に回避不能。

しかも出る場所場所はランダムなので何度も巻き込まれる奴は巻き込まれる。

すでに弦太朗の目の前には3体の魔獣が出現しており……彼自身も腰にフォーゼドライバーを巻き付けた。

『3……、』

『オウ……コウチヨウノハヤミデズ……!!』

『ダディジャナイヨオオオオオオオ!!!!』

「ったく……本当に何言ってるのかわかんねえなこいつ等!!」

『2……、』

「ま、前より数少ねえし……今回もチャッチャと片づけるぜ!!」

『1……、』

「変身ッ!!!!」

カウントが終了すると同時に弦太朗はフォーゼドライバーのレバーを入れた。

彼の全身をコスミックエナジーが包み込み、如月弦太朗を宇宙の戦士……『仮面ライダーフォーゼ』へと変貌させる。

変身が完了し辺りに煙が噴き出ると、フォーゼは両腕を空へと突き上げた。

「宇宙キターーーーーッ!!!!!!仮面ライダーフォーゼ!

！さつさと倒させてもらっぜー！」

お決まりの決め台詞を言うと、フォーゼはベルトに嵌め込んだスイッチを一つオンに。

『ロ・ケ・ツ・ト／オン』

右腕に『ロケットモジュール』を装着すると、ロケット噴射で魔獣の一体へと『ライダーロケットパンチ』を放つフォーゼ。

鋭いパンチが魔獣を突き飛ばすと、続いて『x』に嵌め込んでいるスイッチを取り外して別のスイッチを装着。

同じ様に『』のスイッチも取り替え、ロケットスイッチをオフにせず新しいスイッチ2つを入れた。

『チ・エ・ー・ン・ソ・ー／オン シ・ザ・ー・ス／オン』

「っしやあー！こいつで行くぜー！」

右脚に近接格闘用の『チェインソーモジュール』、左腕にも同じように近接格闘用の『シザースモジュール』を装備。

先ほど1体ぶっ飛ばしたので……残り2体。

ロケットモジュールで急接近してチェインソーモジュールでまずは1体を切り裂き、続いて再びロケットモジュールを噴射させて最後の1体に近づく。

シザースモジュールで魔獣を突き上げ、追い打ちで下からのロケットモジュールアッパーを叩き込んだ。

魔獣が地面に落ちると、宙に浮かんでいるフォーゼはフォーゼドライバーのレバーを入れる。

ロケット・チェインソー・シザースの……3大必殺技の発動だ。

『ロ・ケ・ツ・ト／チ・エ・ー・ン・ソ・ー／シ・ザ・ー・ス／リ

ミットブレイク』

「ライダーロケット連続十文字切りいいいいいい！！！！！！」

一旦ロケットモジュールで一番近くにいる魔獣に接近。

勢いを落とさずにまずはその魔獣をチェインソーで切り裂き、そのまま今度は次の魔獣へ。

そちらはシザースで流れるように切り刻むと、最後に一番遠くにいる魔獣をシザースとチェーンソーで、その名の通り『十文字』に切り裂いた。

アマノオオオオオオオオオオ!!!

最後に意味不明な言葉を叫び、爆散する魔獣。

勝利を確信したフォーゼは全てのモジュールを解除して右手で自分の頭を撫でると、『へへッ』という声を上げた。

「どんなもんだ！仮面ライダーフォーゼを舐めんなよ！そんじゃ、早速賢吾達とところへ……あれ？」

おかしい。

何故魔獣を倒したのに結界が解除されないのだろうか？

確かマミ達の話では、魔獣を倒せば魔獣が生み出しているはずの結界も消える。

それなのに……と、フォーゼは頭を傾げた。

消えるには時間が掛かるのかな？と思いつつながらフォーゼドライバ―の変身解除スイッチに手を掛けた時……、

ゴオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

⌈
^
?
⌋

突然、後ろから叫び声が。

思わずフォーゼが振り返ったその先には……先ほど倒したはずの魔獣の１体が起き上がり、彼に飛びかかっているという光景が。

バンツ!!!

シュウウウウウウウウウウ……！

「あ、あれ……？」

「甘く見てるのはそっちでしょ？」

「あ、暁美！！」

何と魔獣の後ろから、更にほむらが魔法少女姿で現れ、彼女はフォゼへ襲い掛かった魔獣を一発で撃破した。

魔獣は消滅するとその場にグリーフキューブを3つ残して完全に消滅。

同時に結界とほむらの変身が解かれ、それに合わせてフォーゼも変身を解除した。

「ありがとよ暁美！助かったぜ！！」

「2度も魔獣に襲われるなんて、あなたよっぽどついてないのね？」

「それでも魔獣を相手にあそこまで戦えるなんて、やはり仮面ライ

ダーというのは僕の想像を遥かに超える力を持っている様だ。実に興味深い存在だね。』

「お、喋る猫！」

『キュウベえだって……もういいよそれで。』

「そうそう、そのキュウベえだったな！何にしてもありがとよ！さすがは俺のダチだぜー！」

「…………ツ！」

弦太郎が言つと、ほむらはそのまま立ち去ろうとする。

だが、それを見過ごさない我らが友達マニアの弦太郎……去ろうとするほむらの腕を掴み、彼女を引き留めた。

「おい待てよ暁美！！」

「もういい加減にして！！！」

『ほむら……。』

「いつもいつも友達友達って……はつきり言つて迷惑なの！！！もしかして、私の事かわいそうだとか思ってるから！？同情なんかでそんな事言わないで！！！」

「お前の為？いいや違うね！こいつぁ俺自身のためだ！！俺はこの学園の連中全員と友達になる！！勿論お前ともな！！」

「何よそれ……意味わかんない……！！私の友達はまどかだけで……あ。」

「まどか？」

しまった……ほむらは一瞬そう思った。

弦太郎は確かに馬鹿だが、こういう事はデリカシー無く、ズケズケと聞いてくるに違いない。

その証拠に『誰だまどかって？』とキュウベえに聞きながら、ほむ

らをチラチラと見てくる。

逃げるのも……こんな事の為に魔法少女の力なんか使いたくない。多分逃げてもこいつの方がフォーゼで追いかけてくるだろう。

だから……もう後戻りはできない。

「なあ、まどかつて……？」

「私も……、」

「あん？」

「私も……何も最初から友達を作ろうとしなかったわけじゃないわ。私だって、最初は友達が欲しくて欲しくて堪らなかった……。まどかはそんな私の最初で……そして最後の友達だった。いいわ如月君、魔法少女の事を知っているアナタになら話してもいいかしらね？まっ……話したところで信じるかはわからないけれど……？」

それから、ほむらは話し始めた。

自分と『鹿目まどか』との出会い……魔女……『ワルプルギスの夜』……魔法少女になった理由……そして自身の持つ能力とまどかの最後を。魔法少女であるマミや杏子、それにキュウベえすら……この話はほむらの頭の中にある夢物語としか思っていない。

自分達の戦っている魔獣が、実は本当は『魔女』と呼ばれる物で、魔法少女達はそれから生まれるグリーンフィードを巡ってお互いに潰し合いをしていたなど……今からしてみると信じられない事ばかりだ。

それでも弦太朗は最期まで真剣に聞いた……彼女の『友達を作らない理由』を知る為に。

全てを話し終わるとほむらはふうと溜息をつき、自身の髪をサラッ

と撫でた。

「そんな……そんな事実があつたのか……………」

「だから私は友達なんか作らない。私の友達は……まどかだけだもの。」

「いや、それは関係ねえだろ？」

「なっ!？」

「第一、その『まどか』って奴は本当に、お前が友達を作らない事を望んでるのか?そいつ、お前の友達だっただろ？」

「そ、そうよ!まどかは私の唯一の友達で……………」

「だつたらなおさらだ!自分の友達が、自分がいなくなつた後にたつた1人で孤独にいる……そんな事思う奴が友達なわけがねえ!だからソイツがお前が友達を作らない事を望んでるわけがねえ!ようやくわかつたぜ!お前が言っている『友達を作らない』って言葉……その事が何で俺の中でつかかつてんのがな!!」

「な、なによ…………!？」

「お前、本当は友達が欲しいんだろ!?だけど、お前はその唯一の友達だつた『まどか』って奴がいなくなつちまつた事を引きずってる!!そんで、新しく友達が出来ても、『またいなくなる』……そう思つてんじゃないか!?だからお前は俺に言つた!!『友達は作らない』!!友達が『いない』じゃなくて『作らない』だ!!本当は友達が欲しくてたまらないのに……いなくなるのが怖くて自分からそれを避けている!!お前は『まどか』って奴を自分の恐怖心

を隠す為の言い訳に使ってるだけだ、そうだろ!？」

『成程ね……僕もようやくすつきりしたよ。君らといるとほむらは楽しそうなのに、何故か楽しくないっていう理由……さすがは仮面ライダーといった所かな?』

弦太郎の気迫の入った言葉に、ほむらは圧倒されてしまった。魔獣にはいくら襲われても圧倒される事は無かったのに……。それに彼のこの言葉、信じていない人間がこれ程の気迫を持ってこんな事言えるはずが無い……。

だがそれでも、ほむらは反論してしまう。

「あ……あんたに私の気持ちかわかるわけない!!私がまどかを言い訳に使ってる……!!?冗談も休み休み言いなさい!!大事な親友をそんな事に使うわけ……!!」

「じゃあ、直接聞いてみようじゃねえか!!その『まどか』って奴にな!!」

「はあ!?アンタ…本当に馬鹿じゃないの!?まどかは……3年前に……、」

「3年前に、宇宙で消えた……か?だったら……、」

『3……、』

「へ?」

『2……、』

「ちょ、ちよつと…!？」

『1……、』

「変身!…!」

フォーゼドライバーのレバーを再び入れ、弦太朗はコスミックエナジーを身に纏い仮面ライダーフォーゼに変身。

変身した時点ですでにリーダーモジュールを発動させており、それで至急でどこかへと電話を掛ける。

しばらくすると……、

『パワー・ダイザー』

と、いう音声と共にどこからか黄色い戦車?みたいな機械と白いバイクが駆けつけ、フォーゼはバイク…マシンマッシグラーの方に跨った。

「乗れ!…!」

「は?え…いや…?」

「いいから早く乗れ!…あと、変身はしとけ!…」

何か凄い気迫なので、ほむらは言われるがままに魔法少女へと変身。そしてフォーゼの後ろに跨ると、フォーゼは『タワーモード』へと変形したパワーダイザーにマッシグラーをセット。

何が何だかわけがわからないほむらに対して……フォーゼはマッシグラーのエンジンを吹かしながら身構える。

第4話 友達を作らないわけ（後書き）

・宇宙行きながら……、

フォーゼ「うおおおおおおお！……！もうすぐ宇宙キタ
—————！！！！！！！！！！」

ほむら「降ろしなさい降ろしなさい降ろしなさい降ろしなさいって
ば—————！！！！！！！！！！」

キュウベえ「ここまで取乱しているほむらは初めてだ。中々見てい
て愉快だよ。」

フォーゼ「あ、暁美、下絶対に見るなよ？」

ほむら「え？」 下見る

ハハハハハハ！！！！！！色んな物がゴミの様だ状態

ほむら「ギャ—————！！！！！！！！！！早く降ろしなさい！！
！っていうか降ろさないで！！！！！！」

フォーゼ「どつちだよ？」

キュウベえ「わー、高いね。」

フォーゼ「っしやあ！！！！このまま大気圏突破するぜ！！！！！！」

キュウベえ「なんだか楽しくなってきたよ。」

フォーゼ「気が合うな喋る猫！！」

キュウベえ「わけがわからないよ（主に君のその僕へ対する扱いに
ついて）。」

結論：ベテラン魔法少女も大気圏突破の恐怖には勝てないbyほむら

第5話 絶対にいなくなる

「もうそろそろ……宇宙キタ

ッ！！！！！！

！！」

「いやあああああ！！！！降ろして！！！！降ろしてええええええ！！！！！！」

『ほむらの怯えた顔なんて久々に見たよ。』

天ノ川学園から数キロ離れた場所にて……空高く打ち上がる一筋の光。傍から見たら恐らく、昼間からロケット花火でもしているだろうと思うだろう。

しかし、実際は違う……これは人だ。

仮面ライダーフォーゼと暁美ほむらだ。

パワー・ダイザーとマシンマッスグラーは合体すると、フォーゼを宇宙へと打ち上げる事が出来る。

彼はほむらの友達を作らない最大の要因『まどか』に会う為、彼女が消えたという宇宙へとほむらを連れて行くというのだ。

一応、魔法少女の魂はソウルジェムに封印されている為、肉体がどうなるうとも死ぬ事は無い。

それに彼女達の肉体を覆っている衣服は、ソウルジェムから生み出される特殊な物なので、宇宙程度の環境状態ではまず、体に傷一つ付く事は無いだろう。

しかし、肉体が傷つくのと精神的恐怖は全くの別物。

いくら魔法少女だからと言っても、1人の女子高生に過ぎないほむらが宇宙……それもバイクでクラスメイトとインキュベーターの合計3人で大気圏突破など本来ありえない……というかあってはいけな

やはりフォーゼは弦太朗だった。

細かい事なんかすぐに忘れる男……如月弦太朗。

さすがにパラシュートモジュールで帰るにしても……ほむらがいるのでパラシュートがまともに機能してくれるかわからない。

一応、気休めの為に彼は『1番』のスイッチを起動。

『ロ・ケ・ツ・トノオン』

右腕にロケットモジュールを装備すると、フォーゼはマッシグラーを乗り捨て、ほむらを抱えて宇宙へと飛び出した。

出力を最大まで上昇させ、何とか月まで行こうと粘ってみる。

うん、よし……、

無理だ。

『仕方が無いなあ……ここでほむらに死なれても困るし、僕が力を貸してあげるよ。』

そう言うと、キュウベえがフォーゼのロケットモジュールに触れた。すると……ロケットモジュールの出力が今までのおよそ10倍近くまで跳ね上がり、先ほどのマシンマッシグラーを超える……まさに『スぺースシャトル』並みの速度で月を目指す。

「おお……なんかよくわかんねえーけど……宇宙超キター……
……………」

「も、もう少しゆっくり……おえ……」

もはや顔が完全に青ざめているほむらは気にせず、月へと一直線に突き進むフォーゼロケット。

やがていつもの見慣れた風景が彼の視界に飛び込んでくると……、

「うわあああああああ！！！！！！」

ドオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

ほむらと一緒に勢いよく……月面に激突した。

ほむらは頭を抱えながら、フォーゼはその頭の形が原因で突き刺さってしまった身体を月から抜こうと頑張りながら何とか立ち上がるうとする。

立ち上がるや否やすぐさまほむらがフォーゼの首根っこを掴み、半ば半泣き状態で大声で叫んだ。

「殺す気かこの馬鹿！！！！アホ！！！！間抜け！！！！」

「いてて……まあ、結果的に生きてんだからいいじゃん！結果オライ！そんな事より、月キターー！！！！！！」

『まさか本当に来るなんて……』

ぶつぶつと文句を垂れながら、ほむらも後ろを振り向いた。

そして……その景色を見ながら彼女は『わぁ……』という少し可愛らしい声を上げた。

そこに広がっていたのは、幻想的な神秘的な光景。

上空にいくつも流れる流れ星

大きめの星同士がぶつかり合い塵となり、宇宙空間ならではの自然現象

そして自分達が暮らしている、丸く青い惑星……『地球』

あまりにも美しく、夢い光景に彼女は目を奪われ…フォーゼとキュウベえはそんなほむらを見てフツと笑いあった。

彼女がしばらく宇宙に見とれていると、フォーゼは彼女の隣まで歩いてき、そして大声で叫んだ。

「お————い！！！！まどか————！！！！聞こえるか————！！！！！！！！！！」

「如月君……？」

「アンタの親友を連れて来たぜ————！！！！教えてくれ！！！！アンタは本当に、暁美が1人である事を望んだのか————！！！！？」

……………。

返事は無い。

当然だ、あるはずが無い。

何しろまどかはすでに……………。

しかしそれでもフォーゼは諦めず、叫び続けた。

ほむらの隣で、彼は一体どれだけの時間叫び続けただろう…？

最初、彼女はフォーゼがこの話を本当は信じていないと思った。

しかし、彼は『まどかに会う』と言って無茶苦茶なやり方で自分を宇宙に連れて来てくれた。

そして今、こうして声が枯れるまでまどかに向かった呼びかけ続けている。

信じていない男にそんな事が出来るのか？ただのクラスメイトの為

に、こんな真似が出来るのだろうか？

答えは『出来る』

何故なら、彼が如月弦太郎だからだ。

「無駄よ……まどかは、もう……。」

「お前が諦めてどうすんだ曉美！！『まどか』を覚えてるのはお前だけなんだから！？そのお前が信じねーと、本当にその『まどか』って奴は死んだことになっちまう！！それでいいのかお前は！？」

「良く無い！！良く無いけど……。」

良くは無い。

だが、どうしても『あの場面』を見てしまった彼女は、『まどか』の名を叫ぶ事が出来ない。

「怖いのか？」

「え……？」

「まどかつて奴の答えを聞く事が……怖いのか？」

「……………」

「そりゃそうだよなあ。それを聞いちゃったら、お前はもう逃げる理由が無くなっちまう。言い訳はもうできねえんだ。違うか？」

「……………」

「お前は怖いんだろ？友達が自分から離れていくのが……。だったから、これからは心配いらねえな！」

「？」

そう言うと、フォーゼはほむらの手を掴んだ。

すると無理やり『友情の印』を彼女にし、拳を彼女に突き付けた。

「俺がずっと傍にいてやる!!」

「なっ……!?!」

「友達を失う事が怖いんなら、これからは俺がずっとお前の傍にいろ!!絶対にいなくならんない!!俺だけじゃねえ!!この喋る猫も一緒だ!!」

『そろそろ名前で呼んでくれないかな?』

仮面の下で笑うフォーゼと、顔を真っ赤にするほむらと、フォーゼの自分への扱いに若干不満を持つキユウベえ。

再びフォーゼが彼女の手を掴むと、彼は月の中心部にある基地『ラビットハッチ』を指差した。

「行こうぜ!!俺の友達を紹介するぜ!!」

「アナタの友達……それって、『仮面ライダー部』……?」

「おお!皆良い奴らばっかだ!!きっとお前も気に入る!!」

無重力に身を任せ、一気にラビットハッチまで行く2人と一匹。

1分ほどで到着すると、彼はラビットハッチの扉を開け、いつもの『仮面ライダー部』へと顔を出した。

「おーっす!皆いるかー!」

「げ、弦ちゃん!?!え?どうして!?何でいるの!?!」

「如月……お前どうやって……?って、どうして暁美もいるんだ!?!それも生身!?!え?ちょ……どうして生きてるんだ暁美!?!」

「こまけえ事にすんな!」

「いや、無理だろどう見ても!!」

ラビットハッチに到着したフォーゼとほむらを迎え入れてくれたのは賢吾とユウキという、彼らのクラスメイトだった。

どうやら今日は彼等しかない様で、部室はガランとしている。

多分、美羽と大文字は本来の部活の呼び出し、JKはただの遅刻、友子はその辺で蟻の観察でもしてるのだろう。

ようやく落ち着ける場所に来ると、フォーゼはスイッチをオフにして弦太郎の姿に戻ると、いつもの空気を胸いっぱい吸い込んだ。

それと同時にほむらも魔法少女の変身を解除し、天ノ川学園の制服姿に。

とりあえず彼女を、いつも美羽が座っている席に座らせると、ユウキが恐る恐るお茶を持って来た。

「ど、どうぞ……。」

「あ……どうも……。」

「聞かせてもらおうか如月？何故彼女がここに……それに、君はどうやってここに来たんだ？」

「おう、俺がここまで来れたのは全部この喋る猫のお蔭だ!」

「……猫？そんなのがどこにいるんだ？」

「なんだよ賢吾、お前目え悪いな。俺の肩の上にいるじゃねえか。確かに、キュウベえは今弦太郎の肩に乗っている。」

勿論ほむらにもその姿は見えているが、賢吾と……それとユウキには見えていないらしい。

それもその筈、キュウベえは本来、魔法少女が魔獣の生み出した空間にいる者、もしくは彼が会話をできなければ困る者にしか姿を見る事は出来ない。

弦太郎の場合は『魔獣空間にいる者』として姿を見えていたが、その直後に彼がフォーゼというキュウベえの予想外すぎる存在に変身したため、例外として姿を見せる事を許しているのだ。

なので賢吾とユウキも彼が許可しなければ見る事は出来ない。

「まあ……フォーゼには俺の知らない事がまだあるという事だろう

…。」

「いやだから猫のお蔭だって。わっかんねえかな？…？」

「本題は暁美の方だ。宇宙服もフォーゼも無しに、どうして彼女は宇宙空間で生きていられるんだ？」

「それはアレだ、アイツが『魔法少女』だからだ！」

「……………どうやらフォーゼの多用は使用者の頭をコズミックエナジーで犯す危険性があるようだな……………。これは改善の必要が……………」

「いやだからちげえって！？相変わらずの石頭だなお前……………」

ポリポリと頭を搔く弦太郎を無視し、賢吾はほむらの下へと歩み寄った。

彼は彼女の隣の席……………つまりいつも大文字が使用している席に座ると、ほむらに弦太郎にしたのと同じ質問をした。

どうして彼女が宇宙空間でも生身で生きていられたのか……………しかし、彼女からの返答もまた『魔法少女だから』

さすがに頭が痛くなってきた、賢吾はふうとため息をついた。

「歌星君……………私からも一つ聞いてもいいかしら……………」

「？　なんだ？」

「こう言ったら悪いけど……………入学したての頃や、つい最近まで……………アナタは何と言うか……………『近寄りがたい人』だった…。それが最近、だんだんと……………いい意味で変わった……………。それはどうして？」

「……………なんだ、てつきりフォーゼの事やこの場所について聞かれるかと思った。簡単な質問だな。」

「あの馬鹿のせいだ。」

「おい！誰が馬鹿だコラ！！」

「弦ちゃん落ち着いて！賢吾君今から良い事言つとこだから！！私達邪魔になるから先帰るね！今日はライダー部お開きって事でまた明日〜！」

「お、おい離せユウキ！あ、暁美また明日なー！」

ユウキに連行されて姿を消していく弦太郎（あとキュウベえも）。彼の姿が見えなくなったところで、ようやく賢吾は心置きなく話せる。

「最初は俺も、仮面ライダー部や友達なんて……バカバカしくて、鬱陶しい……目障りなものだと思っていた。だが、その大切さを教えてくれたのが……不本意ながら、あの馬鹿だった……というわけだ。」

「大切さ……？」

「ああ。アイツは俺の事を、命がけで救ってくれた。俺だけじゃない。風城先輩もJKも大文字先輩も野座間も……皆アイツに救われた。そしてこの仮面ライダー部に入った……。」

「……………」

「だから俺は変わった。アイツは、色んな意味で俺の目標だ。俺はアイツの……如月弦太郎の友達である事を誇りに思う。」

「……彼に言われたの。『俺はいなくならない。俺がずっと傍にいてやる』って……この言葉、信じてもいいと思うかしら？」

「愚問だな……………当然だ。」

「……………そう。」

お茶を飲み干し、そのままほむらは席を立ってラビットハッチの出入口に立った。

クルリと振り返り、彼女は少し微笑むと、何も言わずにその場から姿を消す。

賢吾はそれを最後まで見守ると…………、

「さてと…………それじゃあ、俺もその『友達』の為に頑張るか…………。」

『黒いベルトとスイッチ』を手に取り、再び研究室へと戻って行った。

弦太郎のせいで、夕飯の準備が遅れてしまったほむらは、何故か自宅では無く、杏子やマミが暮らしているマンションの方へと足を向けていた。

何故かは知らないが、今日は彼女達と一緒に夕飯を食べたい気分になった。

キュウベえがいないが、いつも通り夕飯途中に現れるだろうと思いながら、マンションの入り口でマミの部屋の番号を押す。

しかし何の反応も無い…………不思議に思った彼女はマミから預かっている鍵で入り口を開け、エレベーターに乗りマミの部屋へ。

ドアノブに手を掛けると鍵がかかっており、留守なのだろうかと今度は隣の杏子の部屋に。

こちらもどうやら留守の様で、自分だけ仲間外れにされたような気がして少しだけ腹が立ったほむらであった。

「マミさんも杏子も…………どうしたのかしら…………？」

『ほむら！魔獣だよ！！』

「キュウベえ？戻ってたの？」

『あの後あの女の子に連れてかれるフォーゼから逃げ出してきたんだ。それよりもマミと杏子が魔獣と交戦中だ！かなり手ごわい……きつと、昨日の奴らの本体だ！！』

「まさか……全然気配がなかったのに……！」

『宇宙に行っていたせいだね……僕でも気が付けなかったよ……。多分だいぶ苦戦してる！行こう！』

「マミさん……杏子！！」

キュウベえと共に、魔獣の下へと急ぐほむら。

何故かは知らないが……魔獣に対して、いつも以上に怒りを感じていた。

第5話 絶対にいなくなる

第5話 絶対にいなくなるなら（後書き）

・その頃のライダー部メンバー

美羽「じゃあ、今日の部活はここまで！皆お疲れ様！」

チア部「「お疲れ様でしたー！」」

大文字「美羽！」

美羽「隼！そっちも終わった？」

大文字「ああ、でも…残念ながら今日はライダー部は休みみたいだ。」

美羽「休み！？学園の自由と平和を守る正義の仮面ライダー部が！？」

大文字「JKと友子達がユウキから聞いたそうだ。色々と向こうであつたらしいからな。どうだ？久々にデートでも……？」

美羽「私を誘うんなら、まずはその鼻につく作つたようなイケメン面を何とかしてから出直して来なさい」 超笑顔

JK「ういーす大文字先輩、風城先輩に伝えてくれました？」

友子「私達もこれから帰るところ……先輩も一緒に……。」

大文字「……………」

JK「先輩？」

大文字「うえええ……ん……！美羽……！」

JK「ちょ、ちょっと！？俺男と抱き合う趣味無いですって！？離れてくださいって……！」

友子「これは……スクープ……！」

JK「見てないで止めて！？ちょ、大文字せんぱ……い！！

大文字「美羽うううううううううう！！（涙）」

第6話 友達の友達は皆友達

「はぁ……はぁ……!!」

「くっ……コイツつええ……!!」

ほむらが弦太朗と共に宇宙へ飛び立っているのとはほぼ同時刻……巴マミと佐倉杏子の2人はほむらやキュウベえよりもいち早く魔獣の気配を感じ取った。

今までの様な雑魚では無く、かなりデカイ大物……それも、彼女達が今まで戦ってきた中でも最高クラスの魔獣の気配。

その威圧感は離れた所でも、痛いほど感じ取れ、近づくだけでもかなりの魔力を消費させられる。

そうしてとうとう見つけた魔獣の本体……結界に巻き込まれて2人は魔法少女の姿に変身。

最初は今まで通り雑魚の魔獣が何匹も襲い掛かってき、彼女達はそれを難なく倒した。

その直後、雑魚の群れを押しつけて来たコイツは魔獣としては非常に小型であり、しかしベテランの魔法少女2人を圧倒するほどの力を見せつけてくれた。

赤い姿を持つ、クワガタの様な魔獣……この姿はまさしく……、

「仮面ライダー型の魔獣とは……何とも滑稽ね……。」

そう、まさしくそれは『仮面ライダー』

都市伝説の中ではこのライダーの名は『ギャレン』というらしい。

確かに仮面ライダーと名乗るには、少々不格好な姿だが……この魔

獣にはギャレンの特徴が多く見られ、技も似通っている。

そして戦闘能力も凄まじく、マミのマスコット銃による弾幕も、杏子のランスによる突撃も全て手に持っている銃一つで防ぎ切り、更に追撃もかなり強力。

今までに無いほどの強敵であり、仮面ライダーの知識など皆無な2人では当然敵の急所などつける筈も無く……このまま続けていれば確実に敗北してしまうだろう。

「おいマミ……まだいけるか……？」

「当たり前でしょ……？さあ、いくわよ杏子さん！！」

「おお！！」

『ウチユウニユメラ……ホシニ……ネガイヲ！！！！』

現在は夜の7時過ぎ。

そんな時間に1人で街を駆け巡る女子高生が1人。

暁美ほむらだった。

宇宙から戻って来た彼女はキュウベえにより魔獣が出現している事を知り、今はそれを探している。

だが何故だろう……場所の特定ができない……？

今までなら気配を感じればソウルジェムが自動的に魔獣の場所まで導いてくれたのだが、今回に限り何故かそれが不可能になっている。

宇宙の力……コズミックエナジীর影響だろうか？

何にせよ、今の彼女は『魔獣がいる』という事実だけを頼りに動いている。

勿論そんな事で、この広い街のどこにいるかもわからない存在を探し出すなんて不可能に近い。

「はぁ……はぁ……くそっ……なんで居場所がわからないのよ！！？」

『僕にもわからない。僕ですら居場所がわからないとなると……これはかなり厄介だね。』

「何とかしなさいよキュウベえ！アンタ、インキュベーターでしょ！？」

『僕らにも限界と言うものはあるよ。僕達は神様じゃないんだからね。』

「マミさん……杏子！！」

人ごみをかぎ分け、再び走り出すほむら。

ただ一心に……仲間の魔力を手繰りながら探していく。

しかし、結界内で感じ取れる魔力などたかが知れている。

わかるのは『この街の中にいる』というところまでで、やはり正確な居場所の特定は不可能。

かれこれもう2時間近くは探しているが、いまだに全く手がかりはつかめない。

いつもならここまで必死になる事はないだろう……しかし、何故だかわからないが、今は相当2人の事が心配になる。

この感覚は……そう、あの終わりの無い魔女達との戦いに身を投じていた頃に、まどかへ向けていた感情に似ている。

まどかは大事な友達……守るべき、大切な親友。

ならマミと杏子は？

魔獣達との戦いにおいて、いつも自分の傍で、自分を守り、自分に守られ、共に戦い抜いてきたあの2人はどうなのだろうか？

今までほむらは彼女達の事を同じ苦しみを共有する『同志』だと思っていた。

でも……本当に彼女達と築き上げたかった関係は『同志』なんかじゃない。

それは……、

「マミさん……杏子……。」

「何してんだ暁美？」

「ッ……！」

突然、後ろから知った声に名を呼ばれた。

この声は……今日、散々自分を振り回してきた、ある意味悪の権化とも言える男……、

「如月君……それに、城島さんも……？」

「暁美さん何してるの？あ、これから仮面ライダー部に賢吾君迎えに行くんだけど、一緒に行く？ほら、暁美さん、一般生徒でラビッツハッチ知ってる数少ない人だし！」

「お前何慌ててるんだ？お、喋る猫も一緒だな！」

『フォーゼ……悪いんだけど、今は君達に付き合っている場合じゃないんだ。』

そっけなく言うキュウベえに少しむっとする弦太朗。

勿論、このキュウベえの姿はユウキには見えておらず、彼女の目には弦太朗が1人で何かぶつぶつ言っている様にしか見えない。

弦太朗の言葉を無視してほむらは再び前を向き、正面に向かって一歩踏み出した。

「どこ行くんだ？」

「行かなきゃ…………早くしないと……マミさんと杏子が……!!」

「巴先輩と佐倉さん？あの2人がどうかしたの？」

「まさか…………また饅頭か!？」

『『魔獣』だよ。』

「それもかなりの大物らしいわ…………早くしないとあの2人が危ない…………!」

「お前…………まさか今から行く気か!？」

「当たり前でしょ!!聞こえなかったの!？早くしないとマミさんと杏子が危ないのよ!!」

「でもお前…………もうへ口へ口じゃねえか!!そんな調子のお前が行った所で、饅頭に勝てるのか!？」

『『魔獣』だよ。』

わかってると言いたげに、ほむらは懷から拳銃をのぞかせた。

自分の体力が限界なのは自分が一番よくわかっている…………それでも、行かすにはいられない。

巴マミと佐倉杏子の下に行かすにはいられない。

弦太郎とユウキに拳銃を向けたまま後ずさるほむら…………勿論撃つ気などない。

これは単なる威嚇だ、効果はあるようでユウキは弦太郎の後ろに隠れている。

しかし、弦太郎はそれに臆する事無くほむらに近寄り、銃身を手でわしづかみにすると、それを取り上げた。

「なっ…………!？」

「どうしても行くんだな…………?」

「勿論よ…………だから邪魔を…………」

「俺も行く!」

「は!？」

『わけが……わからないよ。』

「そんなヘトヘトなお前を1人で行かせられるか!俺も行くぜ!!
ユウキ、お前は賢吾んところに行ってアイツに指示を出すように頼んでくれ!」

「あ……うん!了解!城島ユウキ、行ってまいります!」

ビシッ!と弦太郎に敬礼すると、ユウキはそのまま仮面ライダー部の部室へと走り去って行ってしまった。

弦太郎もマシンマッシグラーに跨ると、ヘルメットをほむらに投げ渡し、自分もヘルメットを被る。

「ちょ、ちよつと待ちなさいよ!?あなたも行くつて……!？」

「おう!お前の友達のピンチなんだろ!?友達の友達は皆友達だ!
!俺も巴先輩と佐倉には色々世話になったしな!」

「でも敵は想像以上に強いわよ!?!今まで見たいな雑魚じゃない……

…本当に強敵なのよ!？」

「喧嘩上等!!俺、こう見えても喧嘩めっくくちやくちや強いんだぜ!」

「そう言う問題じゃ……それに居場所だって……。」

「居場所なら……。」

『3……、』

『2……、』

『1……、』

「変身ッ!」

フォーゼドライバーを腰に巻きつけ、仮面ライダーフォーゼへと変身を遂げる弦太郎。

左手にはすでにリーダーモジュールが装備されており、彼はそれをちょこちょこ弄ると、『おっ！』という声を上げてリーダーをほむらに見せた。

それはこれから約2キロほど離れた場所にあるビル。

「多分ここだ。ここにゾディアーツとおんなじ反応があるぜ。」

「ま……真逆の方向……。でも、これがマミさん達だっという確証は……、」

「行ってみる価値はあるだろ！！早く乗れ！！しっかりつかまれ！！」

『行こうほむら。今はフォーゼに従おう。』

キユウベえは一足早くフォーゼの肩の上に飛び乗り、ほむらを誘導。彼女も……背に腹は変えられぬとマツシグラの後ろに跨った。

ここから2キロとなると……バイクだとだいたい10分前後ぐらいだろうか？

これでは時間が掛かりすぎる……そう思っているとフォーゼが『フン』と鼻を鳴らし、ベルトのスイッチを一つほむらに見せつけた。

「コイツで一気に行くぜ！！」

「！？……それって……ま……まさか……！？」

『ロ・ケ・ツ・トノオン』

「それじゃあ早速……目的地イクー……」

「やっぱりそれかあああああああああああああああああ
あ……」

本日2度目のロケット噴射。

マツシグラのエンジンと連動したそれは、もはやロケットと呼ぶ事すら失礼なスピードでマミと杏子が魔獣に襲われている場所まで一気に飛び立った。

第6話 友達の友達は皆友達

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9840x/>

フォーゼマギカ

2011年12月28日21時55分発行